

## 情動刺激への注意配分が再認記憶に及ぼす影響

劉 美加

情動を喚起する刺激の種類により、再認成績に及ぼす影響が異なるのはなぜか。これについては、先行研究で一貫した知見が得られていない。本研究では、情動刺激の再認成績に対し、情動刺激に対する注意配分の要因が関与しているかどうかについて検討することを目的とした。

実験 1 では、Becker(2012)の課題を参考にして、情動刺激とニュートラルな刺激を用い、それらに対提示して再認させる記憶課題を行った。情動刺激にはより多くの注意が配分されると予想した。その場合、情動刺激はニュートラルな刺激よりも再認成績が高く、ニュートラルな刺激は情動刺激と対提示された場合に再認成績が低くなると考えられる。実験の結果、情動刺激の方がニュートラルな刺激よりも再認成績が高くなった。一方、ニュートラルな刺激については、対提示された刺激によって再認成績に違いは認められなかった。この結果から、注意資源が常に一定ではない可能性が示唆された。情動刺激に対し注意がより多く配分される一方で、再認成績に関しては、情動刺激の間に差が確認されなかった。種類を問わず、情動刺激に対し、同様に注意が集中する傾向があるため、再認成績も同程度であったと解釈された。

実験 2 では、注意を調べる課題と再認課題を別々に行った。注意を調べる実験として、ドット・プローブ課題を用い、情動刺激に対し注意がどのようにはたらくのかを検証した。情動刺激と無意味刺激が画面の周辺部に提示され、一定時間後、刺激が提示された位置にターゲット刺激が提示された。情動刺激の位置に提示されたターゲット刺激に対する反応が無意味刺激の位置に提示された場合よりも速ければ、それは情動刺激に注意が引きつけられた結果と考えられる。この実験の結果、情動の効果により、ポジティブな刺激に対し注意が引きつけられる一方で、ネガティブな刺激に対し注意が遠ざけられることが示唆された。このことから、ポジティブな刺激に対して注意がより多く配分されると解釈された。一方、再認課題では、ネガティブな刺激よりもポジティブな刺激の方が再認成績はより高かった。情動刺激の間に生じた情動の効果による注意配分の差が、再認成績の差に影響を与えたと解釈された。

実験 1 と実験 2 の結果から、刺激の持つ情動的特徴により、視覚的注意が引きつけられたり、逆に注意が向けにくくなること、その注意配分が刺激に対する記憶に影響を及ぼすことが明らかになった。とりわけ、ネガティブな刺激は、注視されにくい位置に提示された場合、情動の効果による注意喚起の効果が弱く、記憶にも残りにくいことが示唆された。ネガティブな刺激を用いて、注意喚起や印象づけを行う場合、注視されにくい場所に提示することを避ける必要があると考えられる。(応用認知心理学)